

開明
小說

春雨文庫

二編
下

20

25

30

35

春雨文庫第二輯卷之下

東京

松村春輔著述

大久保春驪校訂

第六回

再説力石吉三郎さてもちろしききちぶらうの女房つまお増ますの丈夫やうぢうが因循いんじゆんする
 小耐こまへかねて床とこ不掛くわみする刀やいばを取とり佳弱かじやくき小脇こわき不抱くわへ
 込褌こまてひきかろげ出いんとせしと引止ひきとどめられても断然りつぜん止とま
 らず思おもひ切きらる有様ありさまの女おんな不似ふあひ合あぬ奮あん奮あんて丈じやう丈じやうも

010190508230

48-7536

及おまびぬ勢いさなひあるとちうしやうバカ石うまづきのうち點頭うまづきコリヤお増おま早はやまら
ままい話わして相談さうだんするとありト言いへども敢あて耳みみへ入い
れず「イヤ」何卒どうぞ仕せせと下ささし「ハテ情じやうの強こゝろい「ア下しふ
居おろと言いのふるアと引居ひきまらるとして趨ま趨まと倭や儼あなぐら
お増まをそと人あ思おもはず小膝こひざとトと戻かく其耳そのみみ元もとへ口くちを
寄よせ「天晴かあつをれく」と心こゝろ底そこたたりし見届まけと恩義おんぎと忘わする
お増まをそと人あ思おもはず小膝こひざとトと戻かく其耳そのみみ元もとへ口くちを
寄よせ「天晴かあつをれく」と心こゝろ底そこたたりし見届まけと恩義おんぎと忘わする
お増まをそと人あ思おもはず小膝こひざとトと戻かく其耳そのみみ元もとへ口くちを
寄よせ「天晴かあつをれく」と心こゝろ底そこたたりし見届まけと恩義おんぎと忘わする

多おほいふ恐おそれ祇園ぎげんの舞子まひこ勇鶴いさざねお惚おぼれてままよらるる現うつ
拔ぬけ「役やく不立ふたちちへ野郎やろうとと見みせららし世間せけんと憚おそる計けいりや
くくと其方そのほうのんんと試たまんんととああ今宵このよひ計けいららば是これおどどの
性根しやうねががああつとと知しるる人ひとの何なにとと包つまん山やまより高たかく
海うより深ふかい我われも其方そのほうもは恩おんを受うけけと村岡むらおかささぬぬの笑わら
東とうへお引ひれるるささきとと墓たむらのの所ところ際ぎわい後ごト世間せけんの取と
り沙汰さたきき衰おとろへへささ悔くいいの事ことと仕しるる除のりとと思おもひ
暗くらんで當坐あうざの滅めつちちや泣なて月日つきひと過すすすち他ひとの暗くら
暗くらんで當坐あうざの滅めつちちや泣なて月日つきひと過すすすち他ひとの暗くら

や風聞かぜきこふ聴きむきく不など腹はらの立たつ島田佐兵衛しまださへゑや文吉ぶんきち
めの仕事しごとと判然はつぜんとさうさうかゝる彼奴かやつらが素首そくびひ
き抜き棄すて且また那村岡なむらおかさゝの修羅しゆらの夜叉よさ執とを暗くらら
させしといと思おもひ煩わづらふ折せもよく備前びぜんの御家中ごうちゆうと言い
かけいよく耳みみふ口くちとよせ」と言いふお方かたが力を添そへく
きふとのとも天てんの助けたすけと悦よろこびても文吉ぶんきちの高たかが
目明めあき一ひと首引くびひき抜ぬけ安やすけととも島田佐兵衛しまださへゑの名なふ
一ひとあふ閑白かんぱくさゝの沛内さいちあゝ並ならぶ者ものるまき當時とうじの泣な
長雨ながあめ三下さんげ二

利きき殊ことふ閑東かんとうの光ひかりりぐあまを従したがふ奴やつらの多おほいの
そり彼やつも中ちゆうく油断あぶげんとせず家いえる在ありても空蟬うつせみの
衣い脱だつのわくふして置あて居ゐ所ところと人ひとふ急いそうせねバ計けい
策さくるく手てと下くだし遣やり損そんねらうら一大事いちだいじと思おもひ案あん
トとるらろより何様どなたやら彼様かいつやら今日けふまは因循いんじゆん其
方かたも荒井あらいで文吉ぶんきちの語ことばとて来きと日ひかゝる村岡むらおかさゝ
の雛あひこを報むくひ敵たかみが討うちたひ一心いっしん既すでふ今夜こんやもかゝる有あり
さゝの志氣しきるゝら僥倖きやうしやう一ひとツの手段てだんがあると言いふ

か
増
奮
か
の
恩
に
あ
げ
て
は
ら
い
ま
す
人
の
仇
と
す
伐
ん
と
す



外そとでも祓はらへ三條木屋町さんじょうきやまちに居ゐる君香きんかうとつゝ女にんの元祇園もとぎん
新地しんちの三軒屋さんけんやの舞子まいこありしと島田佐兵衛しまださへゑが請うけいど
別妾べつめかけとして置家おきうちを島田しまだの忍しのびて此こゝところへ
折々しりしり来るくるところと先頃りつぜんよりして夫それさんも出で
這まる時ときと入いり来きる君香きんかうの家うちへ来きると狙ねらひ
取とり押おへく討捕うちとらむ袋ふくろの崩おぼれひとけしども如何いかに
ふせん便宜べんぎと知しる由よしなきとサ此こゝ処ところが工夫くふうど何なんと
お堀ほり傳つたへて求もとめり君香きんかうの家うちへ立た入いる赴向しゆかうが有ある

今宵こんしやう一人ひとりを文吉ぶんきちの家うちへ往むかひ勝かちつと働はたらき
君香きんかうと親おやしくさるうへ島田しまだの来きるとの直ただに知しる
彼奴かやつめと首尾しゆびよく討うちつと志し文吉ぶんきち如ごとき其日そのひの中うち
ふも踏殺ふみころせり今いま文吉ぶんきちと討うちつとて島田佐兵衛しまださへゑとその
俣またあいて村岡むらおかさむの河原がわら前まへへ立た込こみ敵たかと討うちま
とと報知ほうちまうす沢たくふの性しやうくめん何なんとお堀ほり尾お下したも
會得あひうが性しやうねりト説諭しやくごさして今いま更さらふ刀やいばと甚そこ処ところへ
並ならび人ひとも乳ちの毒どくらうい身みありと信しんひ胸むねと撫なげ

吐息つき「左様」と関取の心とわいあつて女の智慧の浅
まうる前後の監えあく且那さなと関東へ下したる
文吉めの仕業と聞き故が討とい一筋ううお前の事
と腰抜けるぞと言と成つて人へ恥うしのお肢も立う
が堪忍して嘖つとろり笑つとろりして「否や」
宜う人「ア」まア魂魄が落ついと开して伎前の内藩
とろへ「ア」コレ声が高い「ハイ」と袖あく口を掩ふ折
も再び時の撞ボオン月落四辺の森々たり

斯て後お坊の本名をかくしお聞とあらうとめ手蔓と
君香の家お求む是の方石吉三郎が村岡老女お助
けらと角力あるうーと言ふとと畧知る人の有
るゆゑあり然れむお坊が一念届き木屋町ある君
香の元あく下婢と尋るありとゆき込早速島
田の別荘の雇ひ人となり諸事お心と配り居と
るお今雷島田が忍びく来り泊んと為ると慥う
お見きりめ夫力石お内通し力石よりして慷慨の

浪士ふ知らせカ石と始り諸士と雖もく木屋町の
 君香が許へ引き入れ一の七月二十日の夜ふぞ有
 りける

然れば君香と枕と並べ島田佐兵衛へ歩臥たり
 一人の窺ふ足音して障子ふ移る武士の影坊
 主ふ驚き準備の一刀抜きさるる蚊帳と飛びいど
 身がまふ人做すと障子と外より蹴すも一跳り入と
 二人の壮士夫とびるより声かけて「島田佐兵衛天

誅の又と請よと切りはくる島田を元来舌頭の剣み人
 の殺しても武術ふの猶疎けとバ闘ひ挑むの勢ひるく
 彼方此方へ潜り逃げ二人の間とつと抜て持くる刀と投
 げ付けるぐる明き一雨戸と



出す前ふ二王の如く突立一の待伏せある一なる力石
ふく「トッコイ何処へ往く積りとト手と差し伸し袷
首掴で後方へ引き戻しそのまゝ宙ふ振ら下ツ相圖
の呼子と吹鳴し同志とまゝ静々と高瀬川まで
退きしり

是より力石の慷慨の諸藩士と共に高瀬川の傍に
て島田佐兵衛と討ちこぼし其首と青竹の先ふ
刺し貫ぬき罪の次第と書き記し二十四日の早

天ふ四條河原へ晒したり又日明一の文吉も此
ことと嘆き大いふ恐れ早くも其身と隠したれ
を替時ヶ程の知れざしじが力石の手ふ手とりけ
終ふ是より生捕三條河原へ連れ行き素をどくと
あし溢り殺し罪とのへる捨札とて死骸と其処
ふ晒せし九月朝日の事みぞ有りける然て是ら
の夏件の僕サのせし復古夢物語と本ふ委
しく掲げ載せしむる省きと此処ふの贅せぬ

あり元来此書の正史の裏そち女の事跡と記す
と以て主音と做しつるりのるるゆゑカ石の妻
阿増が貞と忠との真心ありぬとの一て人不知
らさんと思ひつるりのすさそあり其後カ石吉
三郎ハ藤村鐵石らふ興一 大和國五條郡旗本揚
たしレゲ十津川の役ニ戦死あつるよりハ増ハ夫
カ石吉三郎及び老女村岡の爲ニ法衣を着テ天
窓を剃らぬと心ふ守る尼法師古郷備前ニ立

かくり行ひまよひく在りけらガ其後の如何なる
一たるや音信を得て後ハ記さん

第七回

名ありあの花の都の麩屋街より中白山小人の知る
大和のさくらに支那印度のらる此の西洋の書籍も
鬻ぐ横田清兵衛の家名と俵屋と唱へ号と嫌々
舎と呼び文事と好む風雅を樂むのそありず劍
術柔術の奥儀残きたる腕前もまこと抜群なり

が義ぎふすそ利り成なり後のちふー金きん銭せんとて媚こゝろ成なり献けんぶる高たか
人の類たぐひひふあらず然されバ亞あ米め利り加か合あ衆しゆ國こくの軍ぐん艦かん
浦うら賀がふ渡わた来きせーりり幕まく府ふの官くわん吏り威い勢せいとるーる
ひ政せい令れいやうやく度どと失しへを勤きん王わう家けの處ちよ士しら外がい異い
の為ためふ日よ本ほんの聖せいせらまんと恐おそれおひく都みやこへ走をせ
集あつり攘じやう夷いの計けい議ぎふ苦く辛しんの折せうかろ横よこ田た清せい兵へい衛ゑ
由よし勤きん王わう第だい一いつのりりのあり放はなりて其その黨とうふ加からり殊と
ふ長ちやう州しゆ侯こうへハ年ねん来らい御ご用ようと達たつー同どう藩はん士し桂けい小せう五ご郎らう
城じやう

前ぜん名な村むら田た次じ郎らう三さん郎らう山やま縣けん半はん蔵ざうの諸しよ雄ゆう志しとーく出で
入いりー專せんら事ことと周しゆ旋せんあーり茲こゝふふいて洛らく中ちゆう
ハ自おのら強さう々と穩おんらあろぬ景けい勢せいゆる幕まく府ふ小せう護ご
衛ゑいの士しと増まーり勤きん王わうの黨とうと拂はらさんとすらと嚴げん
重じゆうまり然しかるふ此こゝ存ぞんどより横よこ田た清せい兵へい衛ゑいハふと祗ぎ
園えん町の藝げい子し京きやう屋やの小せう常じやうとて今こゝ年ねん十じゆ元げんふなる美び
嬢じやうのりへ通とほひ始はじめーが日ひふ増まー其その中ちゆう深ふかくる
り隱かくすと為なれど今いまハーも浮うき名なとらますぞあぞ成なり

りみけり

○梓弓たるるとい言へど風さんと寒さ忍ます睦月

もたや中の十日の末ッうゝ人の年の落つく夜を降

り出す六つの巻びらよ淡雪の糸ありなが

ぬぬおのるをとりりくも着て寐一蒲巻の白ふ

て綿とるりく東山今朝の景一きい言ぬとて十

五六ある美嬢が二階の障子と細目よつけ表のか

と覗いそ見るがうアノ一寸常おさん来くは浣よ積

つこととト言れて同年むろの乙女も外面と赤るが

めアホニ常ぼるさんのやうる浮れ座頭も雪の降つ

この白く見るほどヨモシ小巻さん早く来て泳あつん

あうぬと言の景色をほ一覧るさのようア一早く

るくつても逃る性くこのの無のさうく寛り

お出るをのいヨそて景色をほ一覧どとサ半可通

ぢやアるいク「丈でも彼人が漢語をつりあいた女

房あてきらあいと「言とりのヲ「へん漢張といの



顔あの赤あい髪いの長ながい鉈な刀ま豆めへ柄えとすげやとらる物ものと
 持もつ居おる人ひとどと思おもつ居おるくせせみ「オヤ」漢語かんごと
 りみの彼あの人ひとが流なが行りせちどめめこの子こへ「馬鹿ばかヲ
 お言いひな彼あつやア枯蘇こそ城外がいのの寒山かんざん寺てらといふいふ寺てら
 の和尚おせうさんご初はつめとのどア祐すけ「オヤ」まア乳ちち樂らるたま
 と吾われ備びア漢語かんごどとろつと居おとのサ「漢語かんごの議ぎ論ろん
 でお鉈な子まを忘わすれこのううネへと小常こじょうふ言いれ二人ふたりのし
 女めへ「ホニ」何なんのげん徳とくふもななぬ言いささりひでひのオお

可か笑わらやと狂くるひまぐらふ次つぎの石いしの階かゝ子こを下くだりて
往ゆきくぐりくぐり

常つねはる常つねあし言いふら小こ常つねが相あ手ての舞ま子こみく
横よこ田た清せい兵べい衛ゑも夕ゆふアアより先せん計けい町ちやうの藤ふじ村むらと呼よぶ
家いみ来きり小こ常つね常つねはる常つね香かうと呼よび抱あびくぐり
が降ふり積つむ雪ゆきの珍めづらしくとく狂あがけよりの小こ
鍋なべどてみ一いつ盃まい始はじめけくろろり藤ふじ村むらの清せい兵べい衛ゑ
が妾めかけ宅たく小こ齊せいく為なし居ゐるところと見みるとまへ

春雨下十二

常つねアアレレまアア雪ゆきとくんら宜いが明あつつをまて往ゆてササと立た上あり
障い子ぢのそむ人ひと寄よりて表へ面めんと見みやり小こ寒さむいおんふ
大おほそく積つつととトトピピツツあやりメメつけ清せい兵べい衛ゑの顔かほと
姪うれーーさくみ見み誥ご荒あ示しらぐら愛あ敬けい毛もうと指さりて一いち寸すん
搔か上あげるぐらアアマ好こう間まさんさんが年としの性しやうまの付つきらり人
と都みやこ々々どし言いふ君きみ花はなさんさんが得え意いで唄うたふ花はなふ百ひゃく
度たび来きる客きやくよりも雪ゆきの一いつ束たばが頼たのみいといふ今日けふの
吾われ儂なまの心こころいさくと名なひまいたつと言いひるぐら清せい兵べい工こう

の傍へ居まが清き清水もまゝ小常の顔と見て莞尔
考るがごとく大きな雪の門ちがひ此頃ぢやア江戸程
の宜のが来て仕こむので氣休めの等が大おん上つと
色観音さぬ〜教師と請待〜手れんの試験と受す
つゝあるめん小常お前さんの検査より外お教師の
の〜とく〜サ夫とお前さんの美しいのさん〜と教師
成り試験と考〜とが〜〜〜氣が揉めて去んき臭いで
ありまをア福お前の極る水性生徒とりつと此方
春雨二下十三

れが揉むの〜ア何時〜い〜水性悪さを
考ま〜〜エさア水性の検査と受ませ〜と膝と摺
よせ押しける折〜常哥と常ぢが徳利と持て
バ〜と階子の段と上り来り〜大さ〜選いお炬
ござの〜〜とら〜ネ〜今あの馬幸さんが雪〜〜けふ
成て来て二人と捕へ悪戯と考るので在すの〜ア
常おもん〜冷〜い手で人お抱つ〜〜〜てサ
常階子の音がま〜〜上つて来〜のちやア〜〜上

つゝ来々々突飛してきうト言ふるもみろくず幫
閑の馬幸ハ階子と荒々しく踏るしつ上り来り
「内江進」と言ひるぐる次の一トるへ蹲踞バ流石
舞子の常おハ夫と笑ひるぐる身と進めヨク
容子の何とく馬幸ハ真面目で老ヤツちこたり「ア
然れバ候朋を文久二年の春睦月の中の五日と
て江戸ハ在あハ大小名ハ規則の伎式ハ徒ひッ登
城ハ賑々ハ西九下折々ハ出出す櫓の太鼓鼓々々ハ

春雨三下十四

らと響くと相番ハ閑老參政出門第一番ハ
久世侍従はい久安藤侍従ハ先驅駕籠こき雨
衣ざり列と正して進ませり坂下門の近き往よ
とんえたる時ハ何とぞと歩出す銃一發安藤
疾るる輿側の衛士とほくぬく弾丸緒とハ大刀頭
上ハ振りかざり踊り出たる六銘の浪士の中ハ先
登ハ進々一人ハ大音あげ振織部正の旧臣三嶋三
郎兵衛ハるるぞ對馬守殿ハ現參るるんと乗物目掛

飛とかる是この推お参さん興き側がわの衛ゑ士しも一いつ同どう刀たと拔ひ防ぼう禦ごの
接せ戦せんいと烈はげしき間まも急いそぎ安あん藤とう侍じ従じゆうの興きより出い出で
て坂さか下したの方かたへ走はしせ往ゆく後あと方かたろげろるより三さん島しまの無な
二ふた無な三さんの護ご衛ゑの従じゆう士しが撃うちとを来きる太たい刀とうと大だい喝かく
一いつ声こゑしと打うき拂はらひつ衆しゆう敵てきの又またの下したとほつと抜ぬけ
汚よごし返かへせ故こ主しゆうの仇あだ安あん藤とう侍じ従じゆう勝しょう負ふしと追おひ
さぬよ切きり付つけぬが肩かた先さきつらつら断た割がく餘あまる力ちからよ
刀たの切き先さきと石いしへカかツつキき散ちる火ひ花はな此こるよ早はやく對たい馬ば

守まもり坂さか下した門かどへ走はしり入いる斯かくくああららんと安あん藤とう方かたも不ふ
意い不ふ備びふり忍しのびの従じゆう者しやと遠とほまきみりて附つかかけは是こゝ是こゝ
ららの勇ゆう士し一いつ同どうふすす事ことありと刀た抜ぬきつと六む人にんの浪なみ
士しと取とりままいい右みぎや左ひだりや前まへろ上うろ下したろ切き
りわわきままば三さん島しまとちちどどめ六む名なの浪なみ士しも今いまは是こゝは是こゝでト
難なんとて切きりり雀さか舞ま城じやうあり湟なのな水みづ際ぎはの土つちとろろじじの
はは是こゝ非ひも無なき世よの今いま朝あさの新しん使し先さき物ものががはは是こゝ是こゝ
ままははテてレれコこテンてんののお仕し舞まいどど身み形かたと帯おびひ盃さか盤ばんの傍そば



へより「横田の且那へ彼様へ話しが好みと申す
と直に紐つけて来やうと云はれ横田の裏と返すと大騒動
併し掃部さまの時分と違つて劍術はくひ鎗の達人
難刀探術鋭謙ありひの巡礼古手かひ節季候よまじく
夕と変させ忍びの供ひしてあるのどろろ水戸の浪人の
内田万之助といふのあんどの大造は強うと云はれどが僕
の夜這ひと来く本望と違はずは仕舞つてこの人無残念で
ござんやうと云はれ是も元の起りの外は人うらむと云はれ

所が浪士と云はれ安藤侯の衛士と一人で二役勤め其骨折の
息はきふお安いは用どが常づるさん一寸お酌をあんが上
奉るつ「餘り變つて新波なので耳へをくり身がをり馬幸
先生が此寒いお大汗ういての接戦と氣が付あんとお常お
そのお不き大きいの人次で多うて呉んまと言はれ紙入と小常お出させ
みぶきん二歩金と二ツ三ツ紙お捨り小常お渡せば小常お馬幸が前よ五羽お
看「是れせんありやア大願成就身振声いろで懐中へ押入れ常づる
め次で貰つて茶碗の酒と一息おぐらと飲をり「と云はれ

是ちやアまうひとあせんさう一ト合戦働うまらうがお礼おれく先へ且那首さき じんまありがく
ら小常さんこつと宜よろくト拌まきとまら清き湯せいべえハ一人何ひとり なまやう点頭うみつきな
がうかう「彼根かひよとの珍説ちんせつが有あく夜よるが夜半よみでも宜よろ知らせく
長々なが持前もちまへが木屋きやと来て居ゐるうう商賣用せうばいようふまうのせど丹にして
す根ねな話はなと虫むしが好すくと見えて何様いかうも入いり早くはやくまきまてへ常
吾備ごひア又芝居あしあの方かたどから此度このど何の狂言あんきやうげんと為なると言いと残
一刻いっくも早くはやくまきまてへ常「吾備ごひもさうまの馬甘あまくいならす奴実
ハ唐茄子とうなすの初はつありと新薩しんさつ芋いもの出でと走はりの話はなとまきまてへ

の清ごらう「馬幸ばきやう子こハ常つねおと戦いくさふ気きどと見みえて頻しきりみ抵たい
枕まくらまるやつ馬世よの中なかつ連つれて魂たましい魄はへ刺さぐ人ちいと荒
く成なて来きまとからネ常吾備ごひの根ねな女子こなんを捕とへて魂たましい鬼おにへ
刺さぐ生なるもるのりんど「真正まことは移うつり悪しい一口ひとくちで縛しばてん下
誉ほめて陰かげでのろけて知しぬ顔かほ「馬幸ばきやうさんすつかりと言いひ所と
穿うつとネ清「自己おのれア常根ねとようや江戸えどの西丸さいまる下したの話はながり
とまて人安藤あんどうさなといひ人の自みづか分の權妻けんさいとう他ひとの娘むすめと
といと異人いじんの女房にようばうふまらうの評判ひやうはんどが実録じつろくとい思おもつと

後へ「馬が僕が常おさん」と口説ふたのも他目くらを喰の
 板どろ実録のりどう安藤侯の一件も大方真正の
 話しでござへやせう常おの何時のるみやら擔端の雪と
 扱んで来て馬幸が衫へ赤込バ馬幸ハ怖り「アアたま打
 との鼻怯む仕方ト首と突出一振り向くとも常おの笑ひ
 手とくさき階子の段まぐ逃往さくり

春雨文庫二編下之巻

春雨二下十九

明治十年第三月十日出版

東京府第壹大區拾三小區
 濱町貳丁目拾壹番地寄留
 山口縣平民

著人 松村春輔

東京府第壹大區八小區
 弥左衛門町四番地

書肆
 出版人 大島屋傳右衛門

